『小さなよっつの雪だるま』
出版記念インタビュー

'11年12月19日
長崎 シューヘー・ガレージで
集平=長谷川集平/Guitar Vocal
クン=クン・チャン/Cello Vocal

『小さなよっつの雪だるま』(ポプラ社)カバー。

2010年1月にマンションの駐車場でみつけたよっつの雪だるま。

―― 出版おめでとうございます！　パチパチパチ！

集平　ありがとうございます。まずは絵本が出るまでの経緯を話そうか。もともとはフリーの女性編集者と始めた仕事だったんだ。池袋コミュニティ・カレッジのぼくの講座に来てた旧い知り合い。'03年に雑誌の取材に来た時に話が出て、いよいよ本腰入れて作るつもりで長崎へ打合せに来てくれたのが'09年7月。彼女のリクエストは「小さな子にもわかる絵本」。それ自体ぼくには掴みにくい話でね。小さい子がわからない本を描いてきたつもりはないから。

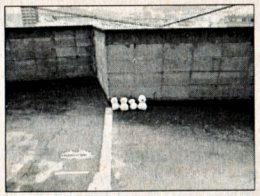
その年が過ぎて正月明けに雪が降った日、うちのマンションの駐車場で雪だるまを見つけた。小さなよっつの雪だるま。同じマンションの小学生N君が作ったんだろう。とても仲のいい4人家族でね。お父さんとお母さんとお姉ちゃんとN君。それを見た時にここにも人生がある、50戸なら50の営みがあるんだなあとしみじみしちゃってさ。そんなことを絵本にしてみたくなって、サーッとシナリオが書けた。すぐに編集者に送ったらしばらくして「小さな子に、という部分がクリアできてない」と返事が来た。それならと送った第2稿に「いとおしい話ですね」と返信があったきり、パタッと連絡が途絶えてしまった。ぼくは早く絵本を出したくて気が逸ってる。で、こっちから第3稿を送ったんだ。そしたら「手紙を書きます」と電報みたいなメールのあとまた時間が経ってった。宙ぶらりんになってる間に『大きな大きな船』の編集者にも原稿を見せたよ。この人とはこれからいい仕事ができそうな気がしてたんでね。ところが読んでおいて「実はもう辞めます」と出版から早々と去ってった。その後しばらくして初めの編集者から届いた長い手紙には「どこの出版社も出さないだろうし、わたしも自信がありません」……体良く断られたわけよ。それに長崎とか京都とか、具体的な地名は子どもの本には使わない方がいいって言われた。

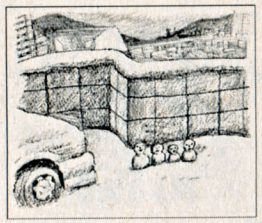
クン　そんな変な話ないよ。長崎が出てくる歌は4～5千曲あるらしいよ。

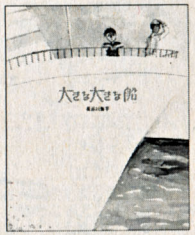
集平　どこかの知らない町ではなく、長崎に雪が降ったという「事件」から始まる話なのに。ぼくはその人とふたりで壁を乗り越えることで、おたがい何かをつかめると思っていたのに残念だ。

もう夏になりかけてた。そのころ特に経済的に厳しかったんで、アセって閃いたのが『トリゴラスの逆襲』。こっちは秋に描き上げて'10年末に出たね。ぼくとしては『大きな大きな船』あたりから作家的に充実した精神状態にあって、ナンボでも描きますよ、仕事させてくれよという感じだった。それで『小さなよっつの雪だるま』は『大きな大きな船』の編集補佐をしてくれたMさんに見せたの。

クン　そしたら冬の絵本だから来年の冬に出しましょう、と。


離れて見るとこうなります。まわりの雪は解けている。


絵本では雪の中に雪だるまを描きました。しかし見えている風景は上の写真のままです。電線はカット。



『大きな大きな船』(ポプラ社)から創作意欲が増してきた。

『トリゴラスの逆襲』(文研出版)は描く予定のなかった絵本。